

Title	『國際労働者協會』の起源に就て
Sub Title	
Author	平井, 新(Hirai, Arata)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.2 (1938. 11) ,p.67(213)- 94(240)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『國際労働者協會』の起源に就て

平井 新

茲に國際労働者協會 (The International Workingmen's Association. L'Association internationale des Travailleurs. Die internationale Arbeitersassoziation.) とは普通に第一インターナシヨナルと稱せられてゐる所のものを指す。

國際労働者協會の發生を促した客觀的情勢に就ては姑く措くが、その成立の直接の契機が一八六三年の波蘭叛亂であることは争へない事實である。

露帝アレキサンダー一世は曩に (一八六一年三月三日) 農奴解放令を發布して、人民に振古未會有の恩惠を施したる、歴代帝王中稀に見る自由主義的人物であつた。彼は更に屬領波蘭に對しても亦自由主義的政策を行はんとしたが、國民的意識に熾烈なる波蘭人民は單に露帝の約束するが如き自由と特權とに満足せず、一途に國民的獨立を要望して讓らず、一八六一年には夙に反抗の氣勢を示し、一八六三年に到つて遂に公然叛亂を企つるに至つた。爰に於て露帝は俄然反動政策に轉じて苛烈なる彈壓を以て臨むに決し、其國語を廢し、其國民性を絶滅せんとした。かゝる苛酷なる露帝の政策に對し世界の同情は翕然波蘭に集つたが、殊に豫てロシャの專制政治に對して激しい反感を抱いてゐた西部ヨーロッパ諸國

『國際労働者協會』の起源に就て (平井)

の波蘭叛徒に對する同情は熱烈なものであつた。イギリスとフランスの政府は波蘭叛亂に對する同情者に充分なる行動の自由を與へ、以て國民大衆間に鬱積してゐる憤懣を緩和しやうと考へたのであつた。

先づ波蘭のために蹶起したのはイギリス労働者であつた。彼等はイギリス政府をして波蘭擁護のために干渉に乗出さしむべく懸命の努力をした。一八六三年四月二十八日、この目的の爲めの第一回民衆大會がビースリ (Beesly) 教授司會の下に倫敦のセント・ジョーハス・ホール (St. James Hall) に於て行はれた。これより先、ビースリ教授は既に “Beehive” 紙上に於て波蘭支持の鮮明なる態度を表明してゐたが、今此の大會の席上に於て、イギリス政府の不即不離の態度を痛烈に難詰し、宜しく政府が波蘭のために即時有效なる干渉を行ふべきであると力説し、クリーマー Cremer も亦同様の意見を述べたのであつた。同大會の選出にかかる代表者は Palmerston に會見したがその會談の結果は頗る要領を得ないものであつた。惟ふにフランス政府の出馬を俟たなければ波蘭のため適切有效なる干渉は望み難い情勢が判明した。そこで大會はフランス労働者代表の參加を得て、改めて會合を催し、この運動を強化擴大する事を決議して散會した。

パリでも波蘭問題に對する關心は倫敦に劣るものではなかつた。殊に同地の諸工場に於ては波蘭人の運命は激しい興奮を喚起し労働者は義捐金の募集に奔走した。此運動では主としてトラン Tolain ピルション Perrhon が中心となつて活動し一時は請願書を起草し、國王に上呈したが、その容るゝ所とな

らなかつた。情勢斯の如くであつたのでイギリス労働者の招請は渡りに船と彼等の受諾する所となつたのである。

第一回大會の約束に基き、フランス労働者の參加の下に行はれた第二回大會は一八六三年七月二十一日、前大會と同様にセント・ジエームス・ホールに於て開かれた。司會者は代議士 John Villiers Shelly^{es}で、發言した労働者は Stainsby, Dell, Facey, Odger, Cremer, Tolain 等の人々であつた。Cremer はペーマストンの外交策を鋭く批判し、彼が過去に於てハンガリーを如何に遇したるかを想起し、彼の眞意が、國民だに黙せば、ハンガリーの場合と同じく波蘭を犠牲に供せんとするに在る事を喝破し⁴⁾、又 Odger の論調は激越を極め對露宣戰をさへ要求した⁵⁾。フランス労働代表者トランは先づフランス労働者代表團がイギリスの労働者に對して敬意と友情とを表明し、併せて不幸なる波蘭のために共同動作を探るべき事をイギリスの同志に要請せんがためにパリの労働者によつて派遣せられた旨を述べ、更に波蘭の直面せる抗争の殘忍悲愴なる事實を說いた後、ロシヤの侵略を阻止する事が文明のために緊急であり、宜しくヨーロッパ一致して人道の名に於て波蘭救援に努力せざるべからざる事を強調し、最後に裏にフランス労働者が倫敦世界博覽會の際に受けたる好意を感謝する所があつた。

併し乍ら大會の直接的目的は達成されなかつた。勿論此大會は英佛政府の干渉をより有效に督勵はしたが、兩政府の不確定なる對露政策は却てロシヤをして波蘭を一層強壓するの刺激となつた。

此の七月二十二日のセント・ジエームス・ホールの集會を以て直に國際労働者協會の發足點なりと看做す學者も尠くはないが、併し斯種の見解は只に妥當でないのみならず又根據がない。事實此の集會の主題は波蘭問題であつて、労働者の國際的結合に關する何等の工作をも進められはしなかつた。換言すれば此集會には直接に國際労働協會の結成へ導く何物をも含まれては居なかつたのである。七月二十一日 の集會を國際労働者協會の形成への直接機縁と看做す事は慥に早計と言はなければならぬ。七月二十二日の集會はその所期の目的を充分達成することが出來なかつたので、其自身としては銘記せらるべき價値はないが、それが全く意圖されたりし重要な事件即ち翌七月二十三日の集會の機縁となつたといふ點に於て改めて銘記されなければならぬ。七月二十一日の集會の翌日二十三日、倫敦労働者の全權代表としての倫敦労働組合評議會 (The London Trades Council) 主催のフランス労働者代表公式歡迎會が Bell Inn Old Bailey に開催された。當日賓客として出席したフランス側代表はビーハイヴ紙の記事によれば Tolain, Perrhon, Aubert, Bibal, Cohadon の五名であつた。議長は Facey 通譯は Jourdain であつた。Jourdain が通譯就任の挨拶で、労働階級の解放は英佛労働者の共通の要求である旨を力説すると、イギリス労働者側の Odger は之に應へてイギリス労働者は波蘭問題を自己の問題として考へてゐる事、自分は Goddard, Coulson, Applegarth, Butler, Potter その他の評議員と共に評議會の名に於てフランス労働者代表を衷心歡迎するものなる事、並に自分は萬國の労働者が相睦み、戰爭と奴隸制に代つ

て、自由と繁榮とが存在するその日が明けつゝある事を希望する旨を述べた。彼に次いで Potter, Cremer, Goddard, Wallarge 等イギリス側の人々が交々起つて歓迎の演説を行つた。尙波蘭の代表と Weber 稱する一名の“ドイツの労働者が出席して居た事は人目を惹いた。最後に此集會は、フランスの労働者に挨拶状を送るべき事を決議し、右挨拶状起草のため委員會を選舉して解散した。茲に七月二十三日の集會は從來の會合に全く見れる所の重要性を有することが直に看取される。蓋し國際労働者協會の創立日たる一八六四年九月二十八日の會合は此挨拶状の直接の結果に外ならないからである。尙前記挨拶状起草委員會は五名^のから成つてゐた。當日の集會の模様について、後にインター・ナショナル創立委員會のドイツ側委員としてマルクスと共に選ばれた Georg Eccarius は匿名でタイムズ紙上に次の如く書いてゐる。

『集會（七月二十一日—筆者搜入）の後、フランスの人達は附近の公館に招待され、爰で色々の事を語り合ひ、それから國際労働者同盟 International Workingmens' Alliance の實行性について論議するためニ翌夕 Bell Inn, Old Baily に特別集會を開くといふ取極をした。Odger はかかる同盟は如何なる基礎の上に建設せられ得るものなるやに就て考慮を求めたが、その問題が突然の事であつたし、時間は短く、又問題の性質が極めて重大であつたので、唯單に國際的同盟を造らうといふ申合せ以外には殆ど話が進まなかつた。Odger は外交的陰謀の根絶、世界平和の確立、資本の蠶食に對する労働の保護の必要なる事を力説した。フランスの人達は何等反対する所はなかつたが唯目下の努力を波蘭解放に限局したい意

向であつた。W. Cremer, (指物師) J. Eglinton (大工) G. Odger (靴屋) から成る委員會が任命され、該問題を熟考し、之を次の集會に報告せしむる事にした。該委員會はフランス勞働者に送るべく挨拶狀の起草方を Odger に委嘱した。

約二ヶ月の後、該委員會は挨拶狀の作成を終つた。此挨拶狀の草案は一八六三年十一月十日 Bell Inn Old Bailey に開かれた新集會に上程され滿場一致承認された。本挨拶狀は Odger の筆に成るものと記はれてゐる。尙同挨拶狀には Thomas Grant, Facey, Goddard, John Eglinton, Odger の署名がある。本挨拶狀は先づビー・ハイヴ紙上に “Adress of english to french workmen” と題して公表せられ、ビースリ教授の手で佛譯されて、Jourdain を通じてパリ勞働者に手交された。その期日は十一月下旬若くは十二月上旬より早くはあるまじ、否恐らく該挨拶狀がビー・ハイヴ紙上に公表された十一月五日以後の事であらうと想像される。

右挨拶狀の冒頭は『イギリス勞働者よりフランス勞働者へ (To the workmen of France from the workmen of England)』となつてゐた。茲にその重點を摘記して見よ。

挨拶狀は先づ『吾等は諸國民の一大友愛といふ久しく遲延された仕事に着手すべく乗出して來た、自由を愛好するフランス國民の代表者を歓迎する事を誇りとする。何人も熱烈にして寛容なるフランス人程一層大なる成功の希望を以て此事業に着手し得るものはない』とフランス人を稱揚し

『現存權力の濫用を妨止するの手段として、吾等は諸國民の友愛に對する諸君の呼號に共鳴する。フランス、イタリヤ、ドイツ、波蘭、イギリス並に人類の利益のために協力するの意志の存する總ての國からの代表者の會合を催さうではないか。會議を開いて諸國民の平和の依て立つ大問題を論議しやうではないか』と國際同胞提携並に國際會議開催の必要を提倡し

『國民間の友愛は勞働のために極めて緊要である。何となれば吾等が勞働時間の短縮によつて、若くは勞働價格の値上げによつて、吾等の社會的條件を改善しやうと企てる時にはいつでも、吾等の雇主は、それならばフランス人、ドイツ人、ベルギー人、その他の國人を連れて來て、安い賃銀で吾等の仕事をやらせるぞと威嚇する。そして殘念乍ら、これ迄はその事が行はれて來た。勿論それは決して、吾大陸の兄弟達が吾等に損害を與へやうといふ惡意からでは無く、總ての國の產業階級の間に規則的、組織的連絡の缺如せるためであつたといふ事を知つたからである。吾等の原則は廉い勞働者の賃銀を、より高き勞働者の賃銀の水準に成るべく近づく様に引上げ、そして又吾等の雇主をして吾等相互の競争のために漁夫の利を得しめざることであり、かくて吾等を又彼等の貪慾なる賣買に適しき最低廉の條件に迄引摺り降ろさしめざる事もあるが故に上記の如き國際的連絡が急速に實現せられん事を希望する』と述べて各國勞働者の經濟的利害が、その國際的提携を必要とする所以を説き更に

『吾等は再び言ふ、”友愛を結べ”と。吾等をして全世界の平和、產業的發展、自由並に人類の幸福を念

慮とする總ての人々と完全なる諒解をもたしめよ』と國際的友愛を強調し、最後に『吾等は諸君と共に言ふ、吾等の第一の團結的努力を波蘭の自由のために向けしめよ。波蘭問題の正義は之を要求し、條約的義務は之を不可避ならしめる』と波蘭救援が國際的協同の第一着手たるべきことを論じて右挨拶狀を結んでゐる。

本挨拶狀は既に述べた如くビースリ教授の手で佛譯され G. Jourdain を介して一八六三年十二月上旬 Tolain に手交され、かくてフランス勞働者に公表された。パリの諸工場ではプロパガンダの重要な資料として使用されたといふ。これに就て、トランは一八六年二月十四日附 *Le Lubez* 宛の書簡中で次の如く述べてゐる。

『それから暫く経つて、一八六三年十一月若くは十二月頃、吾等の友人 G. Jourdain が來た。彼は吾等に挨拶狀を手交すべくイギリス勞働者の依頼を受けてフランスに來たのだつた。友人達が招集され、挨拶狀が朗讀された後、皆で一大勞働者會議の提案を以て應ふることに決した』⁹⁹ と。

イギリス側の挨拶狀がフランス側に手交せられた時、既に國際勞働者會議開催の意圖がフランス勞働者の中に強く動いてゐた事が此書簡から窺はれる。

然るにこの挨拶狀に對するパリ勞働者の回答は意外に遅れて、一八六四年四月（又は三月末）恰も倫敦旅行へ出發の豫定であつた青年ブルジワ民主主義者の手に託されたイギリス勞働者側に手交された。

かくもパリ労働者側の回答が遅延するに至つたのは果して何故であつたか。

イギリス側の挨拶状がパリ労働者の手に受理せられた時、恰もパリでは第一區並に第五區の補缺選舉が一八六四年三月二十日並に二十一日に施行せらるゝ事になつて居り、ために全市は選舉準備に多忙を極めてゐた。この補缺選舉に際し Tolain, Perrichon を首班とするパリ労働者間に於て、労働者は從前の如く急進ブルジョワ政黨を支持すべからず若くは労働者は自身候補者を擁立すべからずに關して烈しい討議が行はれたが、結局、労働者は自ら候補者を樹立すべきであるとなし前記 Tolain を立候補せしむるに決した。かくて Tolain の立候補は一八六四年三月六日、第五區に於て宣言せられたのである。¹⁰

然るに一八六三年五月の選舉以來事態は労働者の立候補にとつて決して好轉しては居なかつた。ブルジョワ政黨の進出目覺しく労働者候補の擁立を一入困難にした。然るに労働候補に擁立せられたる Tolain 及び之を支援する總ての民主主義者及び労働者と共和主義者との間に立て、その間を斡旋せんとした Henri Lefort 等の人々に對し、彼等は労働者候補擁立の名に隠れて秘かに優勢なるブルジョワ黨を切崩さんとの魂膽を有するものであるとの風説が盛んとなつた。茲に於て一つは斯る疑惑を一掃すると共に、他は労働立候補の必然性と其獨自の政綱を廣く宣明するための一の宣言書を發表するに決し Henri Lefort 宅に數度會合の後、一の宣言書を作成した。本宣言書は署名者六十名なるに因んで『六十人宣言書』¹¹ "Manifeste des Soixante" と稱せられた。本宣言書は先づ二月十七日、"Opinion Nationale" 紙上

に發表され、その後直ちにパリ及び地方に於る多數新聞紙に公表された。

この宣言書の理論的部分即ちブルジョワ秩序に對する批判は全くブルードンの見解に一致した。然しづら、それと同時にブルードンの政見を斷然放棄して、労働者のための獨立政黨を作る事、政治の局に労働者の利益を代表する労働候補を擁立するの必要を強調した。宣言書は労働者の解放は労働者自身の任務であるべきといふ原則を力説した。而して右宣言書の提唱する所のものは必ずしもブルジョワ政黨に對立するものとしての労働黨の樹立に在るのではなく、單にブルジョワ政黨よりも、より良く労働者の喫緊の要求を代表し得るが如き意味の労働政黨の樹立を以て甘んずるものである。又宣言書の意味する労働者の解放とは決して現行經濟秩序の根本的變革の謂ではなく、唯單に現行經濟秩序が提供し得る總ゆる可能性の利用を意味するに過ぎない。換言すれば決して階級鬭爭を説くものではなく寧ろ階級協調を説くものである。Albert Thomas が此書を評して『六十人宣言書』は政治的平等は眞の立法的平等をもたらすものであるが故に、社會的平等の實現に充分であるとの幻想を抱いてゐた。勿論彼等は雇主との妥協を説き諸利害の眞實の一一致を説いた。……悲しい哉、彼等は軽て労働階級の解放が、しかも容易な業ではないといふ事を學ばねばならなかつた』と言つてゐるのは蓋し適評である。

『六十人宣言書』は或は Tolain の筆に成るものと云はれ、或は Henri Lefort の手に成るものであるとも稱せられてゐる。前説を探るものは Malon, Riazanov¹³⁾ であり、後説を探るものは Tchernoff¹⁴⁾ であり更

に Tchernoff を支持するものは Thomas¹⁶⁾ である。茲に兩説の黑白は姑く措か、兎も角、この宣言書に署名した六十人中、後刻インターナショナルに參加せし者が尠くなかつた事を思へばインターナショナルの初期に於けるブルードン主義の優勢なりし事實が首肯されると思ふ。

三月二十日の選舉に Tolain は敗北したが、その労働階級に與へた效果に鑑れば、此選舉戰は決して徒勞ではなかつた。即ちプロレタリヤをして唯自力に依頼するの外なき事を自覺せしめ、その從來懷抱してゐた階級觀を是正し、その政治的無關心を覺醒せしめ、彼等を漸次革命的方法に押進めた。¹⁷⁾ 時の政府をして結社禁止法の改正を眞面目に考慮するに至らしめたのも亦此選舉戰であると言はれてゐる。¹⁸⁾ 一八六四年の選舉戰は實にパリの戦鬪的労働者の全體的努力を要求した。¹⁹⁾ イギリス労働者の挨拶狀に對するフランス労働者側の回答が遅れたのは専らこれに起因すると言はれてゐる。この事に就て Tolain は Le Lubez 宰の書簡の中で次の如く言つてゐる。

『それから（一八六四年）三月二十日及二十一日の選舉が來た。この選舉運動で吾々は Lefort 君と知合になつた。この選舉運動が會議計畫を直接に進捗させる事を妨げた』²⁰⁾ と。

選舉終了後パリ労働者の懸案の「回答」問題は再び前記の人々によつて取上げらるる事となつた。豫て回答文の起草を依嘱されてゐた Tolain は選舉後始末委員會の席上で右回答文の草案を朗讀して、その協贊を求めた。此席上には Henri Lefort も出席してゐたが、彼は此問題の前後の經緯についてはこ

れ迄何も聞いて居なかつたので、議題は一體何であるかと質すと、イギリス労働者の挨拶狀に對する回答並に之に關聯して國際労働者會議開催問題を議するのだと教へると、彼は自分も其計畫には大賛成である。自分は近く倫敦旅行の豫定であつたから、回答狀を携行し度いと申し出たので前記回答狀は Lefort に託されてイギリス労働者に手交さるゝ事となつた。尙、之に就て Tolain の Le Lubéz 宛一八六五年二月十四日附書簡には左の如く書かれてゐる。

『選舉後（一八六四年三月二十日及二十一日）後始末のために招集された會合で、余は起草を委託されてゐたイギリス労働者宛回答狀を朗讀し度いと同席の友人達に提議した。出席しては居たが、これ迄この問題に就ては何も知らなかつた Lefort が一體問題は何事であるかと尋ねたので、會議計畫を議してゐるのだと話すと、自分もそれに大賛成だ、自分は丁度倫敦に旅行することになつてゐるから吾等の回答狀を傳達し度いと言つた。吾等は彼に此回答狀及 Potter, Bocquet, Jourdain 宛の挨拶狀を渡した。これと共に Lefort 君の活動は始つた』²¹⁾ と。

Lefort の倫敦旅行は四月であつた。イギリス労働者の挨拶狀に對するフランス側の回答狀は此時、豫定の如く Lefort に携帶されて間違ひなくイギリス側に手交された。これに就て當の持參者たる Lefort は一八七〇年七月五日、パリの Rappel 紙上で次の如く述べてゐる。

『余は一八六三年²²⁾ 國際協會の確定的提案を倫敦にもたらすために、パリ労働團體から一人派遣された。

余は余の友人で通譯の勞を取て呉れた Le Lubez 君の案内で Odger 君が議長のイギリス労働者の會合に導かれた。パリ労働者の挨拶狀の朗讀は喝采され、そして熟考せらるゝ事となつた。²³⁾』と。

パリ側の回答狀が九月二十八日 St. Martin's Hall に於ける國際労働者協會の創立に先立つ五ヶ月以前即ち四月に既に Lefort を通じてイギリス側に手交された事は以上 Tolain 並に Lefort の證言に徴して最早全く疑ふ餘地が無い。然らばインターナショナル創立の日たる九月二十八日至る五ヶ月の間は何事が行はれたか。何故に尙五ヶ月の歲月を必要としたか。此間の消息を傳ふるものは Le Lubez 並に Tolain の書信である。

Le Lubez は一八六六年一月二十五日附の書信の一節で次の如く述べてゐる。

『彼 (Lefort を指す——筆者) は吾々の家に宿泊した。そして彼の考へを余に語り創立委員の選定方を余に依嘱した。余はイギリス人、波蘭人、ドイツ人、イタリヤ人、イスラム人等善良なる労働者を物色するに五ヶ月を要した。遂に St. Martin's Hall の會合がやつて來た²⁴⁾』と。

Le Lubez は倫敦に亡命せるフランス人であるが、Lefort と同じく三月の選舉後、フランス労働者間に國際的協會設立の意圖あることを聞か、爾來、この企圖に關してフランス労働者のためにイギリス労働者との連絡仲介の勞を惜まなかつた。上記の書信によると四月 Lefort の渡英の際、國際協會創立委員選定の盡力方を依頼されて、その適當なる人物の選定物色に五ヶ月を要したと言ふのである。

他方パリでは何をしてゐたかと言ふに、之を知るには前出 Tolain の Le Lubez 宛一八六五年二月十四日附書簡の一節を見るのが捷徑である。『彼 (Lefort——筆者註) が仕事の完成のため倫敦で何をしてゐたかは小生よりも貴下の方が一層よく御存じの筈である。併し貴下の御存じない事がある。それは彼がパリに歸還した後の事、彼は吾々が彼の氣に入る様に敏速に仕事を進めないと思ひ込んだらしく、それで彼は十日後吾等の集會に來なくなつた。併し彼が出席しなくとも吾々が代表者倫敦派遣費調達のために規則的醵金を繼續する事には別段少しも差間へなかつた。Lefort 君が來なくなつたので吾等の友人 Perrchon を煩はして、旅行出發の準備は出來た旨を傳へるために彼を訪問して貰つた。すると彼は貴下にその事を知らせるために手紙を書く約束をした。其後十四日経つても何の音沙汰がないので又 Perrchon が訪ねると、彼は答へて「君等が愚圖々々してゐるので、イギリス人は君達が此問題に就て餘り重きを置いてはゐないのだと信じて、公式會合に就ての彼等の意向を變更してしまつた。君達は單に私的に組合員によつて迎へられる事にならう」と言つた。そこで公式歡迎であらうが無からうが、吾等は覺悟の前だと答ふると「よしそれならば貴下 (Le Lubez) に返事の手紙を書く事にしやう」と言つた。その後又改めて Perrchon に訪問をやへ Lefort は、公式會合が開催される事に決定した事、而してその日取りが九月二十八日に定つたといふ事を知らせて呉れた⁽²⁵⁾』

上記 Le Lubez 並に Tolain の書簡を讀むと倫敦の Lubez 側に於てもパリの Tolain 側に於ても別段

事を急いで居なかつた様に見受けられる。この事が Lefort の氣に障つたらしく。と申るのは Lefort は四月倫敦に使して、パリに歸還した後、五月中にでも直に計畫の實現を期してゐたのである²⁶⁾が、Tolain 達の態度が案に相違して、ひどく暁氣で、自分の思通りに事を運んで呉れない。茲に Lefort 與 Tolain 達の間に感情の齟齬が生じたために意外に時日が遅延したものと思はれる。更に他の推測を許されるならば、かく時日の遅延した事は或は代表倫敦派遣費調達が圓滑に運ばなかつたためであつたかも知れぬ。遮莫倫敦に在つて、創立委員を物色し、直接にイギリス労働者側と接衝して、會合の日取を九月二十八日と決定するに到る迄に擢あ着けた Le Lubez の努力は Lefort, Tolain 等の盡力と共に深く多しきなればならぬ。・

かくて一八六四年九月十七日のルーハイヴ紙上に九月二十八日に開催される會合の次第が次の如く發表された。原文の儘掲げるにとどめる。

“When the People of France and England understand their duties and unite, the Great Problem of the future will be solved.”

A public meeting

will be held at

St. Martin Hall, Long Acre

on Wednesday evening, September 28 th, 1864.

when

A deputation

appointed by the workmen of Paris

will deliver their reply to the Adress of

their english Brethren and submit a plan for a

better understanding between The Peoples.

The meeting will be interspersed with Songs etc.

Chair to be taken punctually at 8 o'clock.

右を期のため上記正やおな承の如ヘドモ。

『ハランベ及びイギリスの國民が心の義務を理解し、心して提携する時は將來の大問題は解決される
であら』ガルベルティ。

公試會合は一八六四年九月二十八日水曜日タロング・ホークーのヤント・マルチン・ホールに開催。當

日はパリ労働者任命の代表はイギリスの兄弟達の挨拶状に對する回答を述べ且つ、兩國民間のよりよれ
領會のための計畫を提案する。右會合中には歌等が搜入される。八時着席時間勵行のこと』

フランス労働者代表公式歡迎會は豫定の如く一八六四年九月二十八日、セント・マルテン・ホールで開
催された。フラン西側からは一八六三年七月二十二日の集會の場合と同じく Tolain, Perrhon, Limousin
等のパリ労働代表者並に Le Lubez, Jules Denoual 等の亡命フランス人が參加した。²⁷⁾

當日のプログラムは左の如くであつた。

(一) ドイツ委員會の開會式齊唱、歌名「工場」

(二) 議長開會の辭

(三) Odger 君フランス労働者宛イギリス労働者挨拶狀の朗讀

Tolain 君の²⁸⁾フランス労働者の回答朗讀

歌「人類の社會的同胞提携」

フランス代表 Tolain, Limousin, Perrhon の演說

Lefort 君演説 Le Lubez 君代讀

ドイツ委員會の歌

決議 Wheeler 君提出 Dell 君贊成、ドイツ労働者 Eccarius 君支持。

『國際労働者協會』の起原に就て(平井)

委員會の任命

議長に對する感謝の投票——Weston の提議 Whitlock 贊成

ドイツ労働者の齊唱が終ると Butler の動議でビースリ教授が議長に選ばれた。彼は滿場の拍手に迎へられて開會の辭を述べた。彼は開口先づ本集會の機縁を述べ、フランス代表の歡迎並に回答狀の受理が今日の會合の目的なることを說き、更に全世界の自由の保證並に維持のために英佛間の密接なる同盟の必要を繻々述べ、諸政府の暴力行爲並に國際干犯を難じ、波蘭に於けるロシヤの行動、愛蘭、支那、イギリス、ニュージーランドに於けるイギリスの同種の行動を痛罵した。彼は又労働者が愛國的偏見に迷はざれず、常に良心の命ずる所を行ふべきを切望し、最後に萬國の労働者の間に計畫された結合が本會合によつて實現の緒に著かん事を希望して急霰の如き拍手裡に降壇すれば、Odger 代つて登壇し前年（一八六三年十二月）フランス労働者に送つたイギリス労働者の挨拶狀を朗讀した。續いて起つたのはフランス代表の一人 Tolain であつた。彼はフランス側を代表してイギリス労働者挨拶狀に對する回答の辭をフランス語にて朗讀し Le Lubez が之を英譯した。Tolain の朗讀したフランス側の回答狀は後年イングリナショナルに於て新にブルードン及びマルクスの強い影響を受くる直前のフランス労働者のイデオロギーを知る上に於て極めて重要な文書である。本回答狀は労働の自由が商業的自由と對立し、而して産業の集中を阻害する事、金融貴族政治による労働の隸屬化等曩の『六十人宣言』と共に通する所渺く

はないが、之に比すれば同一思想にしても遙に強化敷衍されて著しい進境を示してゐる。²⁹⁾ 尚前の宣言書に於て未だ部分的、潜在的であつたブルードンの影響が明確に表面化するに至ることが認められる。殊に後年 Chaudey や Duchêne に見らるゝ如き金融的封建制に對する大膽なる批評の如き全くブルードン的思考を髣髴せしむるものがある。

次いで Le Lubez はフランス労働者側の會議組織計畫案を述べたが、それによれば、倫敦在住の各國労働者から成る中央委員會を任命し、その本部を倫敦に置き、下級委員會をイギリス及びヨーロッパの首都並に重要都市に置く。中央委員會は議題を提出し、下級委員會をして審査討議せしめ、その結果を中央委員會に報告せしむ。中央委員會の日星しい意見とその到達したる結論とを各國語にて公表する。本會議に參加したる諸國代表者は翌年再び、ベルギーに參集して第一回會議を開催すべしものとす。これがフランス労働者側の提案にかかる會議組織計畫案の骨子であつた。この腹案は Tolain, Le Lubez, Denoual の間に於て凝議作成されたもので、後に述ぶるが如く Wheeler の動議で採擇せらるゝ事となつた。

Le Lubez の演説が終るとドイツ人の齊唱となり、之が終ると Le Lubez は再び起て Lefort の起草した挨拶狀を朗讀した。

次いで Wheeler によつて次の如き動議が提出された。

『本集會は吾等が挨拶狀に對する吾がフランス兄弟の回答を聞くことを得たので、吾々は再び彼等兄弟達に歡迎の辭を呈する。而して彼等の綱領は労働者の狀態を改善するに在るものと思考せらるゝが故に、之を國際的協會の基礎として採用する」と。更に斯る協會の規約作成のための委員會を任命し、新會員採用の權限を附與する事³¹⁾』

Wheeler が此提案の採擇方を自ら懇意に懇願した。イギリス労働者 William Dell、アイル蘭労働者 Eccarius、イタリヤ労働者代表 Major Wolff、フランス労働者 Bosquet 及び Forbes 等が交々起つて賛成演説をした。票決の結果、滿場一致を以て可決され、此提案に基く、全ヨーロッパのために國際協會を組織すべく目的を以て委員會が組織されたといふ事だ。右委員會の委員の顔觸は次の如くである³²⁾。

Blackmore, Whitlock, Fox, Nieass, Noble, Hartwell, Odger, Gray, Stainsby, Weston, Cremer, Morley, Pidgeon, Lucraft, Longmaid, Le Lubez, Wheeler, Leno, Lama, Eccarius, Trimlett, Howell, Jules Denoual, Shaw, Shearman, Osborne, Richardson, Racey, Goddard, Kethrik, Bosquet, Major Wolff, Dr. Marx.

委員會の任命に次いで、議長として會議指導に當り又豫て労働階級の利益擁護のために不斷の盡力を惜みなかつたピースリ教授の厚意と勞苦に對して深甚の敬意と感謝を表する」ことを一致決議し、最後にフランス労働者次いで他の國々の労働者のために交々萬歳を三唱して此歴史的會合は閉じられた。

上記假委員會の中に始めてカアル・マルクスの名が見へる。これより先き、マルクスは招待されてセント・マルチン・ホールの集會の來賓として列席してゐたのである。どうして彼はここに出席する様になつたのであるか。之に就てマルクス自身一八六四年十一月四日附、エンゲルス宛書信の中で次の如く書いてゐる。

『國際労働者協會

少し以前にロンドンの労働者は波蘭のためにパリ労働者に書面を送て、此問題について行動を共にせん事を促した。パリの方でも、代表者をよこしたが、それに先立て來たのは Tolain と言ふ労働者で、この前の選舉にパリ労働者候補に立つた快漢だ。(彼の同伴者達も全く愉快な若者達であつた。) 一八六四年セント・マルチン・ホールで公的會合を開くことが Odger 及び石工で、石工組合の書記 Cremer によつて告示された。Le Lubez といふ者が僕の所に派遣されて、僕がドイツ労働者のために大會に助力し、特に一名のドイツ労働者を辯士として出して呉れないかといふ事等を頼みに來た。僕は Eccarius を出したが、彼は立派にやつてのけた。そして僕は黙り役として演壇の上で彼を助けた。今度はロンドン側からもパリ側からも眞實の「有力者」が出席するといふ事を知つた。だから斯種の招請は何れも断るといふ僕の年來の規則を棄てる事に極めたのだ。(Le Lubez といふ者は三十代の若いフランス人だが、Jersey と London とで育つて、立派に英語を話し、フランスとイギリスの労働者の非常によい仲介者

だ。音楽の先生で、フランス語も教へてゐる。)

大會は窒息するほどあつしり詰つてゐたが、(それは今明かに労働階級の復活が起りつゝあるからだ) Major Wolff が在倫敦イタリヤ人労働者協會を代表した。國際労働者協會を創立して、その總務委員會を倫敦に置く事、及びドイツ、イタリヤ、フランス並にイギリスの諸労働者協會の仲介機關とする事が決議された。一八六五年に労働者總會をベルギーに召集することも同じく決議された。大會で假委員會が任命された。イギリスからは Odger, Cremer その他舊チーティスト、舊オーヨン主義者、イタリヤからは Major Wolff, Fontana 等、フランスからは Le Lubez その他、ドイツからは Eccarius と僕、委員會は隨意に多數の人々を勧誘するもの權限を與へられた。そこまでうまく行つた。第一回の委員會には僕も出席した³³⁾と。

即ちマルクス自身の言ふ所によると、彼の大會出席を勧誘すべく派遣された者は Le Lubez となつてゐる。此點に就ては多少の疑義が存する。即ち Fr. Lessner は一八九八年に次の如き事を述懐してゐる。『イギリス労働者は此會合（一八六四年九月二十八日）に又共產主義労働者教育協會々員を招待し、同時に労働者の此國際的親睦に出席するやうにマルクスにとりなして呉れといふ希望を表明した。小生は彼にイギリス労働者の希望を傳へ、それから招待者並に同會合の目的に關して一二三報告すると、マルクスは出席する事を承諾した³⁴⁾』と。

茲ではマルクスの直接勧誘役は Lessner 自身となつて居る。マルクス自身の證言と Lessner のそれは全く符合してゐない。その黑白を明にする材料は固より、今日存在しない。マルクスの大會出席を勧誘した書類が今一つ存在するがそれは倫敦労働組合評議會の Cremer が署名した左の如き招待狀である。

『マルクス殿

拜啓 同封のビラに發表してある會合を組織した委員會は謹んで貴下の御臨席を願ひます。この書狀を御差出し下さらば委員會室に這入れます。委員會は七時半に開會致します。 敬具

W・R・クリーマー35)

兎まれ、マルクスの大會出席の動機がイギリス労働者、詳しく言へば、倫敦労働組合評議會の人々からのお招待に基くことは明かである。然らばマルクスは怎うして倫敦労働組合評議會から招待を受ける事となつたのであるか。その機縁如何。共産主義同盟解消以來啻にドイツ労働者のみならずその他諸國の労働者の中集會所の役目を果してゐたものは夙にドイツ労働者を中心として設立されてゐた共産主義労働者教育協會であつた。而して當時、イギリスの雇主がイギリス労働者壓迫のため輸入する大陸労働者中殊にドイツ労働者との競争のもたらす有害なる結果を解消するためにはドイツ労働者と連絡を計る必要ある事をイギリス労働者が痛感するに至つてからは、前記協會と倫敦労働組合評議會との間には密

接なる關聯が生じた。共産主義同盟以來の名士であり又前記協會の幹部であつたマルクスが該評議會の招待狀を受けたのは實にかかる縁由に基くものである。かくてマルクスはセント・マルチン・ホールの大會に出席し、同大會選定の假委員會に Eccarius と共にドイツ労働者側を代表して委員に任命されるに至つたのである。併しどドイツ労働者側はセント・マルチン・ホールの大會に到る創立事務には何等關與する事はなかつたのである。

假委員會は本部を倫敦の Soho, Greek street, 18 に置かれ、その第一回會を開いた。先づ委員の人數を前記二十一名より五十名に増加して陣容の強化を計り、次いで總務委員會を任命し、その議長には Odger、會計には Wheeler、書記長には Cremer、通信書記としてフランク側 Le Lubez、ヘタリヤ側 Major Wolff、ヘイツ側カアル・マルクス、波蘭側 Holthorp、瑞典側 Jung 等夫々任命され所あつた。³⁶⁾此會議に於てこの新設國際協會に初めて『國際労働者協會』“International Workingmen's Association”なる歴史的名稱が冠せらるゝ事となつた。而してこれは主として Eccarius, Whitlock の提唱に基くものであり、尙多數のイギリス人が此提案を熱心に支持したといはれてゐる。故に始めて第一イニシアシヨナルは正式に孤々の聲を擧げたのである。

1) L'Agitation revêt la forme d'une pétition, à rédaction de laquelle Tolain concourt activement. Cette supplique en faveur d'une nation malheureuse se couvrit rapidement de signatures. Bientôt elle est remise à celui qui détenait en

son pouvoir "l'épée de la France." Une fin de non recevoir accueillit la manifestation populaire; on avait oublié que si la constitution impérial concédait aux Français le droit de pétition, ce n'était qu'au près du sénat seul qu'il devait s'exercer. (Fribourg, Association internationale des Travailleurs 1871 p. 9)

② Rudolf Meyer (Der Emancipationskampf des vierten Standes Bd. I, s. 120) や St. Pauls Hall や誤譲勿論誤譲

である、

3) Riazanov はその著「マルクス、エンゲルス傳」では第一回大會の場合と同じく司會者をビースリ教授と書いてゐるが Marx—

Engels'近著の體文 Die Entstehung der Internationale Arbeitersassoziation は John Villiers Shelly が翻訳した。

⁴⁴ He (Cremer) had no faith in it. He remembered how he had treated Hungary and he believed he would sacrifice

Poland in the same way, if the people of England followed him so as to do.

Yet our peace party knows, that the best way to preserve peace was to make Russia leave her hold on Poland.

George Howell の如き其一人である。彼はインターナショナル創立假委員會のイギリス側委員の一人であつた。彼は一八七八年

『The Nineteenth Century』に掲載された論文 “The History of the International Association” の中で次の如く記される。

る。

"The immediate event which led to the formation of the International was a meeting in favor of the indepen-

dence of Poland held St Martin Hall, London in 1863, on which occasion a deputation from Paris attended." The

茲に Howell は一八六三年とのみ記して月日を明記してはゐないが、Howell の意味する「直接の事件」が一八六三年七月廿一日の St. James の集合を指す事は明かである。蓋しフランス代表出席の下に行はれたる波蘭擁護の集會は同年に於ては七月廿一日の St. James Hall の會合を指して外にはないからである。但 Howell 及 St. Martin Hall と記してゐるのは勿論彼の lapsus memoriae 也

八〇。

- 7) 用ひの歴史 W. R. Cremer, T. Grant, Facey, C. Goddard, G. Odger らの (Nettlau, Der Anarchismus. 1928. s. 67) と Eccarius ら W. R. Cremer, G. Odger, I. Eglinton の (Nettlau, Der Anarchismus. 1928. s. Times. 28, Oct. 1871, cité par Riazanov. op. cit., s. 168—169.
- 8) Max Nettlau; Zur Vorgeschichte der Internationale. Dokumente des Sozialismus. 1905, V. Bd. s. 327.
- 9) Albert Thomas; Le second Empire (1852—1870). p. 227. (Histoire socialiste sous la direction de Jaurès. Tome X.)
- 10) 本論文は Albert Thomas; Le second Empire p. 216—223 に取扱はれてゐる。これはアーヴィングの著書「第二帝政の政治的體力」(De la Capacité politique des classes ouvrières) が本論文に刺激をうけたとするのが最も古く、本論文は必ず彼の著書に取扱はれてゐる。その次にアーヴィングの著書は必ず後で取扱はれる。
- 11) 12) Thomas; op. cit., p. 224.
- 13) 14) Malon; Exposés des écoles socialistes français. Paris, 1872. p. 192.
- C'est après la publication des manifeste des Sixante conçu par des mutuellistes et rédigé presque exclusivement par Tolain (Fevrier 1864), que Proudhon écrivit ce livre "De la capacité politique des classes ouvrières, où après avoir félicite le parti ouvrier de son initiative, il s'écrie....."
- Riazenov; op. cit., s. 178.
- 15) 16) Tchernoff; Le parti républicain sous l'Empire. p. 407, 31.
- Thomas; op. cit., p. 225.
- 17) Thomas; op. cit., p. 231.

- 18) Riazanov; op. cit., s. 182.
- 19) Thomas; op. cit., p. 239.
- 20) Nettlau; op. cit., s. 327.
- 21) Nettlau; op. cit., s. 327.
- 22) 1864年秋 Lefort の Lapsus memoriae による、1864年夏の英國旅行である。Lefort の語によれば Odger 講師の紹介で会議に参加したが、かねてオーディアの倫敦滞在は1864年夏の11月11日から12月始め、又 Lefort の倫敦旅行は1864年11月後半から12月始めである。Lefort の倫敦行は凡て1864年夏の英國旅行である。Lefort の倫敦行は凡て1864年夏の英國旅行である。Lefort の倫敦行は凡て1864年夏の英國旅行である。
- 23) cité par Riazanov. op. cit., s. 183. Anmerkung.
- 24) Nettlau; op. cit., s. 326.
- 25) Nettlau; op. cit., s. 327—328.
- 26) Nettlau; Der Anarchismus von Proudhon zu Kropotkin, Seine historische Entwicklung in den Jahren 1859—1880. Berlin, 1927, s. 71.
- 27) Nettlau; P. Vésinier の紹介文を掲載する Dokumente des Sozialismus Bd. V. 1905. s. 328 に掲載された。西用されるとある。
- 28) プロケッタの新聞では Le Lubez にて「労働者の回答文を朗讀したいたい」とある。"Reynolds Newspaper" 2. Oct. 1864, で Tolain が朗讀した記録がある。又 Nettlau の著書である Tolain の記述である。Nettlau; Zur Vorgeschichte der Internationale. Dokumente des Sozialismus. Bd. V. s. 328. Anm.
- 29) Thomas; op. cit., p. 242.

『國際労働者協會』の起源と発展 (4)

- 30) ベギニア側の辯護士 Lefort もハノラ労働運動の組織者と見られてゐる。Le Lubez が記載した Lefort 起草の採決状の全文は Riazanov の翻文 (Marx-Engels Archiv Bd. I, s. 197—198) が掲載せられてゐる。
- 31) Thomas; op. cit., p. 243. Riazanov; op. cit., s. 198.
- 32) 33) 業界會の入數は 1,700 人 Thomas が半ば記述する (Thomas; op. cit., p. 243), Stekloff の記述によると 1,000 人だ (History of the first International p. 46), Lorwin が半ば記述する 1,000 人以上、スベーリヤー、イタリヤ、ポ蘭 11 県、瑞典 11 県、日本 10 県、中国 10 県 (Labor and Internationalism. 1929, p. 35—36) Crispin と Lorwin の記述が異なる。 (Arthur Crispin; Die Internationale, 2. erweiterte Aufl. 1920. s. 13)
- 34) 35) 改造社版 ベルクハーフェン集 第十九編 1911—1912 年翻文は筆者に於て多少變じた。
- Friedrich Lessner; Vor 1848 und nachher. Erinnerungen eines alten Kommunisten. In: Deutsche Worte. 1898. April s. 156. 摘要 Sixty years in the social democratic movement, London. 1907, p. 33—34. cité dans Nettlau; op. cit., s. 373. Riazanov; op. cit., s. 189—190.
- Riazanov の訳文は Riazanov; op. cit., s. 189.
- 36) Rudolf Meyer; Der Emancipationskampf des vierten Standes. 1882. Bd. I, s. 121—122.